

所属	言語文化研究科 英語・英語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 26 年度
氏名	澤井 優嘉	指導教員 (主査)	岡 秀夫

論文題目	<b>幼児の英語力と家庭環境の関係</b>
------	-----------------------

### 本文概要

日本の公教育における英語教育は、小学校第 5・第 6 学年で年間 35 単位時間の「外国語活動」の必修化が始まるなど、学習開始年齢の早期化が進んでいる。筆者の運営する保育園においても、5 年前からネイティブの先生による英語活動を取り入れているが、実際の英語活動を観察すると、園児によって学習態度や習得技能にバラつきがみられる。そのような個人差が生じる要因として、学習者要因における個人差もさることながら、家庭環境（文化的環境や経済的環境、保護者の学歴や普段の行動、子どもへの働きかけ、学習支援など）が児童の英語力に少なからず影響を与えているのではないだろうか。先行研究は学童が中心で、同様のことが未就学児についても言えるのか、また、どのような環境がどのように英語力に関係しているのかについては明らかになっていない。

本論では、言語発達の基礎理論を土台に、母語および第二言語習得における臨界期仮説、年齢要因、環境要因を検証し、さらに、環境要因として家庭環境に焦点を当て、保護者への質問紙と児童英検結果から得られたデータをもとに、(1) 保護者の学歴、収入、語学力、海外経験によって幼児の英語力にどのような差が生じるのか、(2) 静的・動的な環境設定が子どもの英語力にどのような影響を与えるのか、について明らかにする。本調査は、筆者の運営する 3 つの保育園に通う、83 名の幼児（4～5 歳）および保護者を対象とした。

本論での調査の結果、幼児の英語力についても、学童と同様、家庭環境と相関を持つことが明らかとなった。保護者の属性と幼児の英語力との相関は、保護者の学歴や語学力、収入が高ければ子どもの英語力も高いという正の関係だけでなく、学歴や語学力、収入が低い場合に子どもの英語力が高いという反比例の関係も確認された。その背景には、保護者の学歴コンプレックスや英語コンプレックスが子どもの英語力にプラスに働いていると考えられる。環境設定については、全体的に何らかの教育的な環境設定をしている家庭の子どもの英語の点数が高い傾向があることが確認された。さらに、絵や文字を見ながら読み進めて行くという主に視覚に訴えかける場合には、「文章」「文字」の点数平均が高く、聴覚に訴えかける音声中心の特性を持っている英語の CD やアニメを流している場合には「語句」「会話」の点数平均が高くなるなど、環境設定の内容によって影響を与える分野が異なることが明らかとなった。また、活動・遊びはどの活動も良い影響を与えており、とりわけ「読み聞かせ」の活動はすべての分野に良い影響を与えていた。その理由としては、子どもにとって楽しい時間であり、絵や文字を見ながら親しみのある両親の声で聞くことができ、一方的ではなくインタラクションであることなどが考えられる。これは、テレビのような一方的なメディアではなく、人が関わり相互作用を促す場が言語習得に良い影響を与えるからと考えられる。

本調査結果は、子どもに英語を身に付けさせたいと願うすべての保護者への重要な手掛かりとなる。なぜならば、保護者の学歴や語学力、収入が低いにも拘らず、環境設定次第で子どもに英語力をつけさせることが可能だということの意味するからである。